

た。ベランダに出ると夜中だというのに明るい。俺は空を見上げた。そこには巨大な月があった。俺は思った。「また変な夢だ。」俺は再び寝た。

水曜日

朝、目がさめると俺の体は重くて苦しかった。上から押しつぶされている気分だ。感覚も狂ってきた。家は傾いている気がする。家の中が暑い。いつもよりも太陽が眩しい。外は静かだ。誰もいないのだろうか？俺の意識は薄れていった。俺は夢を見た。まわりの家が崩れていった。しばらくして地震があった。家の物がすごい速さで落ちてきた。天井も落ちてきた。俺の夢はそこで終り、しかし目覚める事もなかった。

## その1

月曜

その日僕はいつもの習慣で、目覚めてすぐに時計の文字盤を見た。

「あれ……」

僕は寝過ぎて浮腫んだ臉をこすった。じっと時計を見る。

「おかしいな」

時計盤には、一時から始まってぐるりと一周、十時までの数字が並んでいた。

「一日って、二十時間だったっけ」

何度か目をこすってみる。が、やはり時計には変化はない。

「おかしいな。一日って二十四時間のような気がするんだけど……」

首をひねりながら僕はベッドから体を起こし、そして重要なことに気がついた。

「……遅刻だ」

結局その日は一時間目を遅刻して大学に行った。

大学で、隣に座っている友人に尋ねてみる。

「おい、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「なんだ」

彼はうっとおしそうな目で僕のほうを見る。

「一日って何時間だったっけ」

「はあ？　なんだそりゃ。新手のジョークか」

「いいから答えろよ」

「そんなもん二十時間に決まってるだろ」

「やっぱそうか」

「そうだよ」

そういうと、彼は付き合い切れないといった表情をして、再びそっぽを向いた。

家に帰ってテレビをつける。何度か時計がモニターに映ったが、すべて一日は二十時間になっていた。

どうやら本当に、一日は二十時間らしい。一日が二十四時間というのは、僕の勘違いか。

「どうやら俺もボケが始まったかな」

首を傾げ、頭をぼりぼり掻きながら、僕はベッドに入った。

火曜

その日僕はいつもの習慣で、目覚めてすぐに時計の文字盤を見た。

「あれ……」

僕は寝過ぎて浮腫んだ顔をこすった。じっと時計を見る。

「おかしいな」

時計盤には、一時から始まってぐるりと一周、八時までの数字が並んでいた。

「一日って、十六時間だったっけ」

何度か目をこすってみる。が、やはり時計には変化はない。

「おかしいな。一日って二十時間のような気がするんだけど……」

そこまで言って僕はふと首をひねる。

「なんだか昨日も同じようなことを言ったような……」

首をひねりながら僕はベッドから体を起こし、そして重要なことに気がついた。

「……遅刻だ」

結局その日は一時間目を遅刻して大学に行った。

飛んで金曜

その日僕はいつもの習慣で、目覚めてすぐに時計の文字盤を見た。

「あれ……」

僕は寝過ぎて浮腫んだ顔をこすった。じっと時計を見る。

「おかしいな」

時計盤には、一時から始まってぐるりと一周、二時までの数字が並んでいた。

「というか、これじゃあぐるりと一周、て感じじゃあないな……」

訳のわからないことを口走りながら、僕はもう一度時計を見た。

「一日って、四時間だったっけ」

何度か目をこすってみる。が、やはり時計には変化はない。

「おかしいな。一日って八時間のような気がするんだけど……」

首をひねりながら僕はベッドから体を起こし、そして重要なことに気がついた。

「あともうすぐで、今日が終わる」

なんだか妙に一日が短いような気がする。だがそんなことを気にしている場合ではない。僕は深夜零時には必ず眠ることにしているんだった。

慌てて僕は再び布団に入る。すぐに目をつぶると、都合のいいもので、すぐに睡魔が襲ってきた。

結局今日は大学に行けなかった。まあそんな日もあっていいだろう。

「おやすみなさい……」

そして土曜日が訪れることは、決してなかった。

## その2

その日僕はいつもの習慣で、目覚めてすぐに時計の文字盤を見た。

「あれ……」

僕は寝過ぎて浮腫んだ顔をこすった。じっと時計を見る。

次の瞬間、僕はベッドから飛び起きた。そのまま急いで服を着替え、部屋を飛び出る。

階段を駆け下り、一階のリビングルームに飛び込んで、掃除をしている母親に文句を言う。

「何で起こしてくれなかったんだよ。これじゃあ遅刻じゃあないか」

母は、きょとんとした顔をした後、急にばつの悪そうな表情をしていった。

「ごめんね、つい起こすの忘れちゃった」

それはないだろ、と思いながらも僕は家を出て、学校に向かう。

その日はやっぱり遅刻だった。

火曜日もやはり、母は僕を起こし忘れた。

幸い今日は目覚ましをかけていたから遅刻はしなかった。

学校で、友達に愚痴をこぼす。

「昨日も今日も、うちのお袋は……」

話し掛けて、ふと言葉をとめる。友人は僕の顔をじっと見て、こういった。

「えっと、おまえ、誰だっけ」

僕は絶句して言う。

「何いってんだよ。新手のジョークか」

友達は、しばし考え込むような表情をしてからぼんと手をたたいた。

「ああ、やっと思い出した」

どうやら本当に忘れていたようだ。まさかこんな友達甲斐のないやつだったとは。

水曜日、今日は祝日だった。

散歩がてら、家から少し離れた公園に行く。

帰り道、幼馴染と道であった。

僕が挨拶をすると、彼女はきょとんとしていった。

「あの、どちら様でしたっけ」

またこれだ。最近この手のジョークでもはやっているのだろうか。

「何いってんだよ。俺だよ」

強引に声をかけると、彼女は僕に、変質者を見るかのような視線を向けた。

僕は居たたまれなくなって、彼女に背を向けた。  
まったくなんだっていうんだ。

木曜日、学校に行って席に座っていると、なんだか回りの視線が痛い。

先生が着て出席を取り始めた。

「加藤、幸野、佐藤……」

だが、僕の名前は呼ばれない。僕は立ち上がって先生に言った。

「先生、僕の名前が呼ばれていません」

すると、先生は眉をひそめて僕を見て、こういった。

「おまえ、誰だ」

僕は、あっけにとられた。先生まで、こんなことを言うなんて。

僕は助けを求めて、回りのクラスメイトを見回した。だが、その全員が、先生と同じ目をして、僕を見ていた。

僕はクラスから飛び出した。何がなんだかよくわからなかった。

金曜日、目を覚まして1階のリビングルームに下りると、家族が、いや元は家族だった人たちが、僕を見て驚いた。

もう家族にも僕は忘れられたらしい。ぼくは不法侵入者として家から追い出された。

とぼとぼと歩きつづける。途中、見知った顔と何度かすれ違ったが、その誰一人として僕に声をかけようとはしない。

僕の存在はこの世界から抜け落ちてしまった。僕の世界は壊れてしまった。

僕は死ぬことにした。これ以上この壊れた世界にいたくなかったから。

## 月曜日

朝、目覚めると目覚まし時計は3時を示していた。  
不審に思いよく調べるとどうやら時計は止まっているようだった。  
とにかく起きて身支度をしたが、服を着る手は思うように動かなかった。  
顔を洗いに洗面所へ行き鏡を見ると、そこには、白髪 of 老人の姿が映し出されていた。  
一夜にして醜く変貌した自分の姿に戸惑いながらも、軽く食事を済ませ、学校へ行こうと駅へ向かった。  
駅には駅員がおらず、電車も動いていなかったため、私は歩いて学校へ向かった。  
道行く人は皆老人ばかりで町には活気がなかった。  
100才を越えようかという年齢でかろうじて学校にやってきた一部の教官をのぞいて、  
教官はほとんどいなかったため、講義はすべて休講だった。  
私はすぐに家に帰り、その日は本を少し読んで床についた。

## 火曜日

気がつくとい私は死んでいた。  
魂となって宙に浮いたまま、自分の死体が転がっているのを観察した後、外に出てみた。  
東京の町はもう何十年も風雨にさらされた様子で廃墟と化していた。  
道には所々に老人の死体が転がっていた。私は他の都市の様子を見ようと西へ向かった。  
名古屋、京都、大阪などどこも人ひとりいない廃墟ばかりであった。  
夜になったので瀬戸大橋の上で魂を休めた。

## 水曜日

朝になると瀬戸大橋は崩れていて、私の魂はその跡地に浮いていた。  
私は外国の様子を見に行こうと、東へ向かった。  
現地時間で昼頃に北アメリカ大陸についた。人工の建造物の跡はほとんどなくなっていた。  
カナダの北部には熱帯雨林が広がっていた。ロッキー山脈には雪は全く見られなかった。  
私は自由の女神の跡地とおぼしき場所で魂を休めた。

## 木曜日

私はさらに東へ向かい、ヨーロッパを目指した。

ユーラシア大陸にたどり着いたが、グレートブリテン島は見当たらなかった。アメリカ大陸からは思ったより遠かった。もはや文明のおもかげを残すものは何もなく、  
退屈な一日を過ごした。

金曜日

アジアを經由して日本に帰ろうと思い南東へ向かった。  
大陸の形がかなり変わっていたのでどこを飛んでいるのか分かりづらかったが、  
インドらしきところが見つかった。ふと南を見ると大きな大陸が見えたので近づいてみると、オーストラリア大陸が移動してきたものらしかった。  
その日は海中にもぐって、かつては島であったと思われるところで魂を休めた。

土曜日

朝、気がつく海水はすっかりなくなり、島らしかったものもなかった。  
地表は真っ赤な液体で覆われていて、空には巨大な太陽があった。  
私は地表に飛び込み、地球の中心に向かったが、  
何がなんだか分からないうちに反対側に出ていた。  
空の太陽は先ほどより大きい気がした。

日曜日

私は緊張のため休むことができず、ずっと太陽を観察し続けた。  
太陽はどんどん大きくなり、やがて私は真っ赤な地表面とともに太陽に呑み込まれてしまった。私は太陽の中心の方へ向かったが、ほぼ中心にたどり着いた時、意識がなくなった。  
次の瞬間私は太陽だった。

1999年 12月 26日

珍しく早起きして外にでかけた。銀行にお金を引き出しに行った。  
もっとお金がほしいと思った。1億円あれば何に使うか考えてみた。

12月 27日

テレビを見ていたら 銀行強盗事件というニュースがあった。  
私が利用している銀行だった。しかも家の近くの支店だった。  
犯人の顔はどこかで見たことがあるような気がする。  
なんだか体がだるくて今日はずっと家にいた。

12月 28日

7eleven でおにぎりを買おうとしたとき、財布の中に1億円分の  
札をみつけた。でもびっくりしなかった。交番に届けるかそのまま  
自分のものにしてしまうか迷ってた。小学の時に財布を拾ったら  
交番に届けるように教えられたが、この財布は自分の財布で拾ったわけ  
ではなかったから、このことを誰にも言わずに家に帰った。

12月 29日

昨夜 悪い夢を見た。自分がその銀行強盗事件の犯人という夢だった。  
とても不気味な夢だった。もうこの1億円はいらないと思った。  
こんな大金を持っている人がかならずしも幸せとは限らないな。と思った。

11月 30日

テレビを見ていたら、その銀行強盗の犯人が1億円分の現金を銀行に  
返したというニュースがあった。でも犯人がまだ捕えられてないらしい。  
なんだか今日は気分がすっきりした。

12月 31日

高級レストランで勘定を払おうとしたとき、財布の中に1億円分のお金が  
ないことに気がついた。でもびっくりしなかった。初詣でに行った。

2000年 1月 1日

2000年を無事に迎えられた。  
鏡で自分の顔を見ていたら、やっぱり誰かに似ているんだなと思った。



## 月曜日

その日が始まりの日であった。僕はいつものとおり朝起きて大学に行き、普通に授業を受け、その後家に帰り、ご飯を食べ風呂に入って寝た。しかし、普段となぜか気分が違っていた。これから何かが起こりそうな予感がしていたのだ。

## 火曜日

僕はいつもどおり起きたが、その時わずかな異変に気づいた。いつもなら起きたときにちょうど日が明るくなってくるはずなのに、この日はまだ、暗かった。それでも家を出る際には明るくなっていたのであまり気にしなかった。大学についてもおかしいことがあった。滅多に休講にならない一時限目の教師がなぜか休講であった。また、いつも講義時間をオーバーする数学の教師が、なぜかその日だけ10分早く終わったのだ。そして、帰りの電車はなぜか普段より速く1時間半で大学から家に帰ることができた。ついこの間きれいにした机の上になぜか鉛筆やノートが散らかっていた。しかし、この日の変化はまだ序の口だったのだ!!

## 水曜日

朝起きて僕は目を疑った。西から日が昇ってきたのだ。これは驚きである。これでは、これまでの天文学の知識が大きく覆されることになるし、第一文部省指定の教科書には「日は東から昇る」と断言しているのだ。これでは急いで書き換えねばならないではないか。また、今まで朝日があたっていた東向の家は、これからは朝は寒い思いをしなければならない。ああ、なんてことだ。いろいろなことを考えて学校に向かったがなんと僕は自分の出身高校に行ってしまった。しかし、なぜか元3年3組のメンバー全員が集まって普通に授業が行われているではないか。僕もなんとなくそこで授業を受け家に帰った。その日はそれ以上変なことは起こらなかった。

## 木曜日

目覚ましがなかった。昨日西から日が昇ってきたので、今日はどうなっているのだろうと窓を明けるとなんと日が昇っていない、真っ暗であった。

「♪その日は朝から夜だった。」というのは正にこのことであろう。これから朝という言葉で辞書で引いてみたらなんと載っているのだろうか。日が昇るときを朝としてしまうと朝が来なくなってしまう。しかし、朝から夜という表現はおかしい。夜ならば朝ではないはずである。なんてことを考えた。この日以来太陽を見ることはなくなってしまった。

その日は、今度は高校ではなく中学校に向かった。なぜかそこには中学時代の

同級生が集まっており、またしてもその当時の授業が再現されていた。この日を境に自分の身にも異変が起こることになる。

金曜日

この日もまたしても朝起きると同時に異変に気がついた。というか、気がつかない方がおかしい。なぜなら寝たまま天井にはりついていたらだ。つまり重力が逆転してしまっていたのだ。これなら走り高飛びなんて競技はなくなってしまふ。そんなことはどうでもいい。テレビを見たら、外出した人が宇宙に放り出されているではないか。僕は怖くなって一日中家にいた。

土曜日

風船という言葉をご存知であろうか。そう小さい頃から良く遊んだ、あの空気を入れて膨らますおもちゃのことだ。なんと僕がそうなったのだ。体が膨らんでいく。みるみる月ほどの大きさになった。なんてことだ!!!

日曜日

…………… 地球滅亡の日。ついに地球は爆発した。

そして僕も …。

しかし、それからしばらく経った後、遥か遠くでまた新たな星と生命が誕生し、何もなかったかのように月曜日が始まっていた。

1月12日 水曜日

朝8時に起きた。冬休みにだらけすぎていたせいはまだ眠い。しかし真面目に授業に出るといふ新年の抱負を思い出し、がんばって学校に行った。1限目の授業は地域文化論だ。ジェンダー論についてのこの講義は、大学の講義にしては先生の話がおもしろく、かつ勉強になるため、1限目にもかかわらずすべて出席している。10分遅れて先生が教室に入ってきた。よく見ると先生の髪が妙にさっぱりとした角刈りになっている。先生も今年こそはと気合いを入れて来たのか。眠い目をこすりながら授業を聞く。よく聞くと先生の口調が下町おやじっぽくなっている。気合いの入れすぎだ。不覚にも眠ってしまった。

ふと目を覚ますと、黒板に神輿の絵が書いてあり。先生が下町の祭りについて語っている。話が脱線しているのか。しかし三十分経っても続けている。これはジェンダー論についての講義ではなかったのか。しかし妙にひかれるものがある。講義が終わった。あたりを見回すと、角刈りの人が妙に多いのに気がつく。気合いが入っている。すれ違う人の髪型に注意を払うとほとんど角刈りになっている。最近のはやりなのか。中にはねじりはちまきをしている人もいる。周囲からは時々威勢のいい江戸弁が聞こえてくる。大学全体が下町情緒にあふれているような気がしてきた。これはいったいどうしたことか。帰りの電車の中では自分以外のすべての人が角刈りだった。妙に恥ずかしい気がしてきた。次の日もまた次の日もそうだった。すっかりそれが普通になった。そろそろ自分も角刈りにしたくなった。

日曜日

ついに角刈りにしよう決心した。そのためには近所にある“ザ床屋”がいいだろう。今までその名前のすごさと角刈りおやじの怖そうな顔から敬遠してきたが、あそこならきっとすばらしい角刈りにきめてくれるに違いない。

月曜日

すばらしい角刈りできまっている。気分よく学校へ行った。周りの人の注目を浴びているのがわかる。通りがかりのひとに突然「その頭、どこで刈ったんだ？」と聞かれる。「駅前のザ床屋だ」と自慢げに答える。気分がいい。

水曜日

自信をもって家を出た。しかし電車の中でだれも角刈りの人を見ない。どうしたのか。1限目の教室に行く。しかしだれもおらず黒板に「神輿のかつぎ方実習 グラウンド集合」と書いてある。急いでグラウンドに向かう。すれ違う人々の髪型に目をやると、不思議と角刈りの方はだれもいない。それどころか

みんなの頭が妙にふんわりとボリュームにあふれている。まるで18世紀フランス貴族風だ。時々「ボンジュール」などとフランス語っぽい声が聞こえる。キャンパス全体が優雅な雰囲気につつまれているようだ。通りすがりの人に突然「ぼんじゅーる？」と言われたので思わず「ぼんじゅーる」と答えてしまった。やっとグラウンドについた。もうみんな神輿をかついでいる。よく見ると先生も学生もみんなフランス貴族っぽい髪型をしている。急いで自分も加わろうと神輿の方へ走って行く。すると突然全員で「ボンジュール！」と威勢のいい掛け声をかけながら神輿をかついで迫ってきた。

ある日、僕は幸せだった。  
お父さんは遠いところに行っていていなかったけど  
お母さんと、それに、弟のひろしがいた。  
僕はいつもひろしと遊んでいた。  
もちろんいじめたりはしない。  
僕はお兄ちゃんなんだから。

次の日も僕は幸せだった。  
1日中ひろしと遊んでいた。  
ひろしがちょっとせきをしている。  
熱はないみたいだ。  
1晩ゆっくり眠れば直るだろう。

その次の日。  
ひろしは風邪を引いたみたいだ。  
熱も出てきたみたいだ。  
お母さんに連れられて病院に行く。  
薬ももらってきたし、もう大丈夫だろう。  
早くひろしと遊びたいなあ。

その次の日。  
ひろしが倒れた。  
お母さんは急いで救急車を呼んで、  
ひろしを大きな病院に連れていった。  
お母さんは、僕の食事のときだけしか帰ってこなかった。  
少し寂しかったけど、僕はお兄ちゃんだから我慢した。

その次の日。  
お母さんが帰ってきて言った。  
「ひろしはお父さんのいる所に行ったの。」  
僕はお母さんに尋ねた。  
「もうひろしと遊べないの？」  
お母さんはちょっと間を置いて答えた。  
「……またあなたが大きくなったら遊べるわ。」  
……

でも、その日の夜、お母さんは泣いていた。

その次の日。  
僕はとても悲しかった。  
何が悲しいのか自分でもわからない。  
けど、お母さんを見て、ひろしのことを考えるたびに、  
とても悲しい気持ちになる。  
いつまでもひろしと遊んでいられると思っていたのに。  
変わらないものなんてないのかな。  
「いや、あるよ。」  
そんな声が聞こえたような気がした。

そして今日。  
僕は幸せだ。  
すぐそばにひろしがいる。  
その近くにはお父さんもいる。  
きっと近くにお母さんもいるんだろう……。  
「ここにいれば、何も変わらない。」  
そう思った。  
そう。僕は、ずっと変わらないものを見つけたんだ。  
これからは、ずっと幸せだろう。  
ずっと……。

日曜日;

今日は彼女とデートだ。朝もいい気分で起きた。  
歯磨いて、顔洗って、コンタクトをはめて、携帯もって、  
と思ったら、携帯がないことに気づく。  
結局待ち合わせの時間に遅れて、  
文句を言われる。  
その後はいい感じで一日が過ぎていった。  
部屋に戻り寝る。結局携帯はみつからなかった。

月曜日;

今日は1限から授業があるので、朝早く起きた。  
不快な一日が始まる。  
とにかく駅に向かってみる。  
なぜか人が少ない。  
1限から5限までみっちり詰まっているはずだが  
休講が多かった。

火曜日;

今日はお昼からなので、ゆっくり寝てた。  
彼女から携帯にメールが入ってた。  
何か手伝ってほしいらしい。とにかく大学に急いで  
行ってみる。今日は人がまったくいなかった。  
彼女と会ってお昼を食べる。  
帰りに財布がないことに気づく。  
駅員に説明すると通してくれた。  
今日の晩御飯は寮で頼んでいたが食べられていた。

水曜日;

朝起きると部屋が無くなってた。  
しかしなぜか愛用の目覚し時計だけは枕もとにあった。  
見ると6時6分を指していた。  
周りが明るいから朝だということに気づく。  
とにかくその場から動いて誰かを探さなければ  
発狂しそうだった。  
私は普段寮に住んでいたのに誰もいないのはおかしい。  
目覚し時計を持って歩くこと10分、ようやく同じ寮に住んでいる

人と会い、なぜ部屋が無くなっているか話してみる。  
結果は出なかった。  
とにかく何もすることがないので、昼寝した。  
起きると夜になっていた。  
明かりはちらちら見えるが次の日に行くことに決めた。

木曜日;

昨日明かりのついていた方向に歩いていった。  
すると自分に優しくしてくれた駅員だった。  
しかし制服は着ていなかった。  
彼も訳がわからないらしい。  
彼女のことが心配だった。

金曜日;

電車が走っていなかったが、レールだけは残っていたので  
彼女の家に向かってひたすら歩いた。  
行くところ行くところほとんど何もなく  
ところどころにアパートがあった。人気はない。  
鉄橋の工事もそのままだった。  
彼女の家はなかった。彼女もいなかった。  
大学もなく敷地だけが残り人が集まっていた。  
みんなで夜を過ごした。

土曜日;

朝起きると、周りにはただ一人だけ立っていた。  
私はその人を知らなかった。  
協力して人を探しても寮の人も彼女も知っている人知らない人  
関係なく誰も何も無くなっていた。  
目覚ましも電池が切れた。まだ昼だと思っていると、  
あたりが暗くなりまわりの風景がどんどん大きくなって  
そのうち見えなくなった。何も考えられなくなった。  
私の命は、、、。



日

いつもどおり昼に目がさめる。  
部屋で一人でいてもさびしいので友達に電話するが、誰も出ない。  
何度もかけるがつかない。  
少し不安になる。  
携帯電話でメールを送ってみるが、  
毎日いやというほどきいてた返事が今日に限って誰からもこない。  
さびしい休日を過ごす。  
でもこの日は夕方には彼女からメールがきた。  
バイトをしていたということを知り安心する。

月

大学へ行くがなぜか自分と仲のいいひとが誰もいない。  
一日中誰とも話すことがない。  
やはりだれとも電話がつかない。  
さびしくなって帰宅してから親に電話すると、つながり少しほっとする。  
さらに彼女にも電話するが、考えすぎと呆れられ相手にもされない。

火

朝から今日も誰にも会わない。電話もつかない。  
彼女からの電話もメールも途切れた。もちろん会うこともできない。  
何かがおかしい。  
家に帰った後、部屋ではなぜか独り言を言っている自分がいることに気づく。  
夜、彼女の家に行ってみるが誰もいなかった。

水

学校に行くのが怖くなっていたが  
おそるおそる2限の体育に出てみる。体育館には誰もいなかった。  
そこを慌てて逃げ出す。  
掲示板をみると休講だった。少し安心する。  
取り乱した自分がおかしかった。

木

今日は学校には行かなかった。  
部屋にこもると落ち着かないので渋谷に行く。  
買い物をした。服を買った。店員は普通に自分に接してくれた。  
うれしかった。

帰り道、電車の定期券を改札口に通したとたん警報がなる。  
しかし機械の故障ということでその日はそのままちゃんと電車に乗ることができた。  
また親に電話するがついにつながらなくなる。  
唯一の話し相手もいなくなり発狂しそうになる。

## 金

なるべくおきないように布団にくるまる。  
この部屋とその付属品がかろうじて、  
自分の居場所を主張してくれているようだった。  
こもるのがあれほどいやだったのになぜかここでは安心する。  
夕方、金を下ろそうとしたが、ATMが使えなくなった。  
通帳を郵便局に持っていくがどうにもならない。  
疑われる始末。逃げ帰る。  
家に帰ると明かりがついていた。  
不思議に思って部屋に入ると知らない人がいた。  
自分の部屋だと主張されわけがわからずその場を後にする。  
吉祥寺の駅で夜を明かす。  
誰も自分を気に止めることもなく通り過ぎていく。  
手元にはわずかな小銭と使えなくなったカード類。  
自分にとって何の役にも立たなくなっていた。  
携帯電話の電池が切れた。

## 土

朝、人々が活動をはじめ音で目がさめた。  
みんな普通に生活している。普通に歩いているように見えた。  
自分が誰なのか自分でもわからなくなった。  
残りの金で切符を一枚買う。  
ホームに入る。  
線路に降り立つ。  
オレンジ色の電車が自分のところに来た。

もはやなにもわからない。あれから一週間ですでに経つ。あの時から、そうあの時からすべてがおかしくなってしまったのだ。もはやなにもわからなくなってしまうだろう。その前にこの出来事を書き残しておく。

私は一週間前まではただの会社員だった。少し前まで実在していた会社と言う組織の一員だったはずである。確かあそこでは食品—人間の生存には必要なものだ—を作っていた。私はそれをいかに売るかを担当していたはずだ。

年明けのある火曜日のこと、1年—もうよくわからない概念だが—の始まりに初めて会社へ行く日だった。その日はとても寒かった。朝から雲で空は覆われ、白い雪がこの東京に降り注ぎ、すべてを白く染めた。真っ白に。今思えばあれは何かこの世を支配する大きな力からの啓示だったのだろう。朝、一人暮らしの私は気だるい正月の夢うつつのまま、会社へと行く準備をした。窓から外を見ると一面の雪。

真っ白な雪。白い世界。

圧倒された私はしばらく立ちすくんでいた。しかしそうもしてられない。正月番組から気分の抜け切っていないニュースを見る。キャスターは女の方で着物姿だ。

「えー、ただいま東京ではすごい雪です。観測史上最大の...」

その時突然電話がなった。

「もしもし」

電話の主は会社の同期の人間だった。あまり親しくはない。

「今、部長から連絡があって、仕事初めは明日になったそうだ。今ほとんどの鉄道が止まって大変な騒ぎらしい」

「そうか、ありがとう」

そうやって私は電話を切った。

ふとテレビに目を戻すと昨日から開かれていた特別臨時国会のニュースだった。昨年末突然増税を発表し支持の落ちた内閣がその翌日大臣のスキャンダルが明るみに出たため総辞職し年を越しての非常審議が続いていた。そのことなのだろう。

「第\*代内閣総理大臣には\*\*選挙区の\*\*\*\*氏が任命されました」

何だくだらない。だれがなったって、だれがいたって、みんなおんなじだ。所詮人間なんてなにかしら欠点があるもんだ。この国、いや世界はだれがいたって、そんなに変わるもんじゃない。ふと新聞—ビニールに包まれていた

が中まで水浸しだった — をみると一面はテロのニュースだった。物騒な世の中だ。世界の革命を目指し聖戦を行おうとするグループが、オランダのハーグにある国際司法裁判所に爆弾をしかけたのだという。

まあ、いい。関係のないことだ。その日はその後一日中ごろごろしていた。テレビでは政治と雪のニュース一色だった。

水曜日

私は久しぶりに朝早く起きると、心地よく朝食を取った。朝のニュースを見る。昨日の雪は今朝方まで降り続きようやくやんだところである。ニュースによると高速が通行止め、大きい国道でも通行規制が敷かれているようだ。だが、私が使う小田急線は運行しているらしい。よかった。家を出ると、すごい雪だった。普段見ている世界が、こうも変化するなんて。私は社会人になるまでは四国に住んでいたのだから、こんなすごい雪は今まで経験したことがなかった。だが現実には厳しい。電車は雪の影響で本数が減らされておりすごい混雑だった。いつもすごい混み様だが今日はいつも以上に増して凄まじい。やっこのことで新宿につくと私が勤める会社へと向かった。新年の目標が朝礼で述べられた。

「わが社が現在置かれた状況は大変厳しい。いかに無駄をなくして効率のよい経営をするかというのが鍵になる。そのためにも諸君は—」  
そして何事もなく今年最初の仕事は終わった。

木曜日

すっかりと雪が解け、道の端に少し茶色見のかかった雪があるだけとなった。今日は雲ひとつない快晴である。気分よく会社へと向かった。その日も何事もなく仕事が終わった。そして、同僚と飲みに行き夜遅く帰った。自宅へ帰る途中、なにやら騒がしい。人だかりができていて、パトカーが何台もとまっている。大きな事件のようだ。しかし疲れていた私は、家に直行した。

金曜日

今日も私は会社へ行っただけ。すると私の同僚の机がない。どうしたのか。

「ああ、会社の経費節減のためのリストラだよ。あいつは、無駄が多い奴だったからな」

と、部長が私に言った。ごく自然に。確かあいつはそんなに業績は悪くないはずなのに。とろとろとのろまな所はあったがその人柄で結構業績はよかった。何故だろう。私が考えていると

「ああ、これからは基本的に休日はなしだ土日でも出社する用に」

といわれた。？ どういうことだ。何を言っているのだ部長は。そんなことは労働基準法に触れるではないか。

「どう言うことですか、それは」

「昨日の役員会での決定だ。無駄な休みなんかどつとれん。まさか君まで文句を言うつもりじゃないだろうね」

「いえ、そんなことはありません」

「ならさっさと、仕事をはじめるんだな」

不穏なものを感じ取った私はその場を何とかやり過ごした。結局その日わかったことは、効率化を図る会社が土日出勤を決めそれに文句を言ったものや、これまで成績不振のものをリストラしたという事。そして無駄をなくし経費節減のためにあらゆることが見なおされるということだ。その日は帰りに一人で飲みに行った。しかし変だ。街のネオンは消えてわずかな街路灯しかついておらずほとんどの店が営業していない。人通りもまばらだ。いつもはそんなことはないのに。ふと見ると、酔っ払いが地面に倒れていた。暗くてよくわからないが会社員のようだ。

「あー、そこの君それに触らないで」

振り返ると消防服のようなものを着た数人がいた。一人が私に言った。

「どうしてこんなところにいるんだ。新政府の世界完全秩序化計画のため無駄な行動はしないように言われているはずだが。何かの用事か？」

とっさの反応で私は答えた

「帰宅の途中です」

「そうか。ではさっさと帰るんだな」

そういうと酔っ払いを数人でなにやら袋に詰めようとしている。光の加減で酔っ払いがわずかな街路に照らされる。よく見ると血で染まっており、直感的に死んでいると理解した。頭の混乱した私はなにも考えず、家に帰りすぐに寝た。

土曜日

朝起きた私は昨日の出来事を思い出した。アレは何だったのか。消防服の奴ら。赤く染まった死体。営業していない歓楽街。まばらな人。そうか！ニュースを見ればいい。なにかあったならニュースになっているはずだ。テレビをつける。しかし映るのは灰色の波だけ。どうしたんだろう。チャンネルを変えてみる。映らない。

またチャンネルを変えてみる。映らない。私は焦った。

私はいつもは見ないNHKにしてみた。すると映った。しかしなにかが違う。様子がおかしい。アナウンサーもなにか様子変だ。

「昨日、新宿で大掛かりな”掃除”が行なわれました。秩序を乱す、下等な生物が巢食う歓楽街では...」

そこでテレビを消した。

.....。

私はある程度状況は理解した。それを確かめなければ。私は会社へ行った。街の様子は変だった。いや、奇妙だった。途中極端に人が少なかった。小田急線もものすごくすいていて座ることができた。立っている人はおらず、空いている席もなかった。普段停車する駅にもとまらなかった。

……。

無駄がなくなっているのだ。いやなくなり始めているのだ。新宿についた。そこには昨日見た消防服を着た連中が立っていた。

「おまえの会社はあそこに移った。」

とだけ言われた。なんとなくはわかった。え？私は”あそこ”としか言われていないのに、どこかなんとかわかったのだ。だが、もうどうでもいい。めんどくさい。会社の様子もいつもと違った。言葉には表せないがそれはまさしく秩序というべきだった。無駄なく、とても速く会社は動いていた。そしてそれに適応し始めている自分がいた。

……。

昼頃、となりの人間がミスをした。

「あ、すいませ…」

その瞬間轟音がした。となりの人間は倒れた。銃だ！直感した。しかし手を弛めるわけにはいかないので作業を続けた。予想通り消防服姿の”掃除”隊員が現れ、もはや死体となった男を”掃除”していった。そのあとはよく覚えていない。いや記憶がない…

日曜日

私は朝起きて、テレビをつけた。何か義務のように。見たこともない男が演説をしていた。

「今世界は変わりつつある。世界に新たな秩序が築かれようとしている。我々が歴史を創ろうとしている。混沌を生み出すものは排除され、無駄がなくなる。この世は…」

私はテレビを消すと会社へ向かった。道端で私は走って逃げている男にぶつかった。

「助けてくれ！”掃除”なんかされたくない」

私はその男を突き飛ばした。そうしないと、自分も撃たれるからである。案の定、その男はまもなく撃たれ”掃除”された。道のあちこちで建物が壊され世界が変えられようとしていた。会社に着く。そして私は部長に唐突に紙を渡された。

—貴殿は本日より秩序構築の親衛隊とす—

要は”掃除”隊員になれということか。私は銃と消防服らしき親衛隊の服を受け取った。どこで受け取ったのか。誰から受け取ったのかは、覚えていない。

とにかく気がついたら、自分は”掃除”の任務についていたのだ。

よくわからない  
よくわからない  
なにがどうなっているんだ  
いったいなんなんだ

いつのまにか私は家に帰り—すでにもとの家ではないが—眠りにつこうとしていた

もう時間がない。そう私は直感した。私の意識はもうすぐなくなるだろう。私はこの世界に適応するだろう。適応していない”私”はもう意識を取り戻さないだろう。あるいは適応していない”私”が撃たれてしまうだろう。一体どうしてこうなったのだろうか。ほんの一週間前までは私は何の変哲もない普通の生活を送っていたのに。

！

わずかな記憶が私に答えを教えた。今朝テレビで見た男は、一週間ほど前に総理大臣となった男だ。そうかあの日から何もかもがおかしくなったのか。

……。

それからこの一週間を振り返ってみた。整理してみる。

……。

思い出せるのはこれくらいか。何かに残しておかなくては。

……。

このままいけばどうせ”私”は消えてしまう。ならば、ならばなにかにできないだろうか。何かを。そうだ、あの男を殺しにいこう。ははっ。おもしろい。よしもう何もかも終わりだ。あの男を殺しにいこう。私はもう眠ることにしたあとわずかな時間は意識があるであろうことも、予想できたので。

\*\*\*\*\*

翌月曜日ある一人の男が”掃除”された。秩序を乱したために……

## 第1日

彼は思いついた。「世界を壊そう。」とりあえず祝福した。何を祝福したのか？そんなことはどうでも良かった。まず、休んだ。

## 第2日

彼はすでにできあがっているすべての物をみた。甚だ良くできている。彼はまず、こう言った。「全地の表にある種子を生ずるすべての草と、種子を生ずる果実のすべての木を与えられたヒト。はい、あなたも。ヒトみんなだよ。君らはもういらぬ。なくなっちゃえ。」するとそのようになった。ヒトが消えた。「海の魚、天の鳥、家畜、野のすべての獣、また地の表を這うすべてのものを支配していたのはヒトだったけど、やっぱ必要ないでしょ。」夕となり、また朝となった。

## 第3日

彼は言った。「水の中の活潑にうごめいているもの、地の上、大空の表を飛んでいる鳥、もういい。なくなっちゃえ。」するとそのようになった。魚や鳥が消えた。夕となり、また朝となった。

## 第4日

彼は言った。

「天の大空に昼と夜を発するもの。そう、君ら。太陽と月。君らさ、定められた祭、日、年のためにしるしになってたでしょ。うん、もういいからさ。なくなっちゃえ。」するとそのようになった。太陽と月が消えた。彼はついでに星も消しておいた。「太陽は昼、月は夜を支配してたけど、別に必要ないでしょ。」夕となり、また朝となった。

## 第5日

彼は言った。「地の青草、種子を生ずる草、それから種類ごとに種子のある実をつける果実、もういい。なくなっちゃえ。」そしてそのようになった。さらに言った。「天の下にある水もさ、一つの場所に集まって乾いたところを作ってる必要ないから、一緒にいいよ。」するとそのようになった。地と海が消えた。夕となり、また朝となった。

## 第6日

彼は言った。「大空ってさ、うん、天。水を上と下に分けてるんだってね。良くわかんないけど、もういい。なくなっちゃえ。」するとそのようになった。大空が消えた。夕となり、また朝となった。

## 第7日



彼は言った。「昼と夜があるのもめんどくさいよね。光ももういっか。」少し考えて、言った。「光、なくなっちゃえ。」するとそのようになった。光と闇が別れていたのが闇だけとなり、昼と夜も消えた。

地は形なく、むなしく、闇が淵のおもてにあり、大風が水の表面を波立たせていた。

彼は考えた。「何もなくなった。全部なくなった。あるのは自分だけだ。いや、自分もないのか？ないことはないだろ。実際モノを考えてるし。我思うゆえに我あり、ってか？でも、ほかに何も無いんだから、やっぱ自分もいないだろ。いるのか？いないのか？どうもわからん。」

彼は考えた挙げ句、いった。「ま、いっか。なくなっちゃえ。」するとそのようになった。

彼は消えた。

第1日目。僕はいつものように渋谷駅を駆け抜ける。今日はいつもより人が多い。時間が悪いかな？などと考えていたら人とぶつかった。僕はよろめき地面に頭をぶつけた。何で人間はこんな固い地面しか作らないのだろうか。人間がいなければこの辺りはどうなっていたのだろうか？

第2日目。しまった、寝坊した。いつもより早いスピードで駅構内を駆ける。しかし、驚くことに人がほとんどいないではないか。昨日と比べると、寂しいぐらい人がいない。何となく不安を感じながら、軽快に駆け抜けた。学校に着くと、その不安が的中していたことに気づいた。教室にも人がいない。一度教室を出て、教室番号を見る。確かに合っている。動揺が隠せない。ふと黒板を見るとこの授業のものと思われる板書がされている。そう、この2限の授業もすでに終わっていたのだ。つまり、もう昼過ぎ。駅に人が少ないのも、このためか。

第3日目。今日はいつものように駅を駆ける。この混み様はいやになる。田舎から出てきた僕にとって朝の移動だけで、1日の体力の大半を失う。人が邪魔でなかなかスピードが上がらない。足取りも重くなる。いらいらしていたら人とぶつかった。怒鳴ってやろうと思ったが、その前に体勢を崩してしまった。今度は頭をぶつけまいと、受け身をとろうとしたところ、頭を蹴られた。くそう、泣きっ面に蜂だ。人間ってやつは…。

第4日目。今日もいつもと同じ。というより、昨日と同じと言った方が正確かもしれない。朝にほとんどのエネルギーを奪われた。唯一違うところといえば、よろけた後に頭を蹴られたのではなく、頭に頭突きをもらったというくらいである。もういやになってくる。

第5日目。今日は気分が悪い。時間もいつも通りなのに駅を駆け抜けることができないのだ。これが唯一のストレス発散の方法なのに…。人の流れに身を任せるしかないのである。これじゃあ、まるで人の渋滞じゃないか。学校にたどり着くのにどれくらいかかるのだろうか？ この日僕が家にたどり着いたのは、日付が変わって午前1時だった。

第6日目。今日は渋滞に備えて早く家を出た。やはり昨日と同じく、渋滞している。早く出たはずなのに昨日より遅れている。そしてついに恐れていたことが起きてしまった。そう、全く進まなくなってしまうのだ。冬とはいえ、こんなに人が密集しているのは暑い何の。最近悪いことだらけだ。いや、そうでもない。人とぶつかっては、頭にダメージを受けていたあの頃と比べれば、こ

けること自体ができないこの状況は幸せと言うべきかも知れない。実は悪いことだらけでもないのかな？ そんなことを考えているうちに動けないまま夜が来てしまった。

第7日目。今日は妙に苦しい夢をみて目が覚めた。いや、実際に苦しかったのだ。これじゃあ朝の通勤ラッシュ時の電車といっしょじゃないか。息をすることさえままならない。もう、頭にダメージがどうのこうの言ってる場合じゃない。頭を地面にぶつけるだけのスペースがあったころが懐かしい。かなり苦しくなってきた。「そういえば今日は朝御飯食べてないや。」

ふと体が軽くなり、気が付くと人混みが下に見える。人混みはどんどん小さくなってゆく。回りを見渡すと驚くことに、東京中、いや日本中がこんな状況である。みんな苦しんでいる。ああ、端の人々から海にばらばらと落ちているじゃないか。

## 秩序と意思

朝を告げる目覚ましがり響く部屋で、私は目を覚ます。

月曜日には気分が重くなる。昨夜から続く倦怠感、日曜が終りに近づく事への憔悴が夜寝ている間に増幅され、眠りの幸福を削ぎ落としているかのように。眠さを噛み砕くように食パンを牛乳で嚥下すると、もう八時半になろうとしている。身支度をして、家を出ようとすると、とりあえず付けておいたテレビに見慣れた顔が出ている。S.ホーキングが大笑いしている。テロップには、「宇宙の謎が解けた！」と書かれている。特に気にもせず家を出てしまったが、一限の教室は大騒ぎになっていた。量子力学の講師だけあって、相当嬉しかったのだろう、量子論と相対論が幸福に結婚できたことについて熱弁を振るっている。何でも、不確定性原理の意味についての理論が完成したらしく、やはりアインシュタインが嘗て言った通り、物理的実在は存在するらしい。つまり、粒子の振る舞いは確率に依らず、運動量と位置の初期値によって全て記述できるようになったということである。

それは本当か？と疑問に思った私は、二限からの時間を全て情報棟で過ごし、工学部のゲイトウェイ700MHzの助けを借りて、自分の振る舞いに対する方程式を立ててみた。

そして、全てが終わってしまったのである。

火曜日。

学校には行ったものの、自分の行動が全て予測できるというのは実に奇妙なものだ。それに、他の物質や人間の動きも明らかである。サッカーでは、ボールの飛んでくる位置を先取りしてダブルハットトリックの活躍。英語では、いつ当たるかが予測できて、そのとき以外は寝ていても安心だった。これは楽しいと思いながら、帰路に着いた。

水曜日。

朝起きる。いつ帰ってくるのかも、何を学校でするのかも、それがどういう結果を齎すのかも、全てが私の頭の中にある。体が自転車の上に位置して、井の頭通りを過ぎて一号館へと進んで行く、私を形作る全ての粒子が一体となって。

木曜日。

一限は統計分析なので、特に出る気もないのだが、実際に方程式の解を見ると、私の体の構成物質はベッドから微動だにしていない。結局、解の通りに二限から学校に行ってみた。昼食のラーメンも、味噌スープ濃い目に追加麺だと

というのがわかった。しかし、何かがおかしいのではないかという感じが消えない。何か重要なことを無くしているのでは、という気持ちが、カレーを作った後の鍋の底に残る焦げ跡のように脳裏にこびりついて離れない。

金曜日。

午後からの実験の予習をしている朝の図書館。しかし、方程式によると、どうやら私はニトロ化に失敗して再実験になってしまうようだ。

どういう事なのだろう？

これから実験をするのだから、その失敗がすでにわかっているのなら、それが起こるといえることはあり得ないのではないか？完璧な予習をして実験に臨み、細心の注意を払えば何事はないのではないか？予習をし尽くし、細心の注意を払っていた私の手は、何故か宙を彷徨い、なす型フラスコを粉々に叩き割ってしまった。

なぜなのだろう？この全身を支配する無力感は、何処から来るのだろうか？私は何をしているのだろうか？

土曜日。

朝から何も考えていない。否、考えていることがひとつも実現しない。方程式の解とは違う動きをしようとする意思とは裏腹に、私の体は方程式の解の通りに動いている。ずっと寝続けていたい気持ちとは裏腹に、朝食を食べた後の私はパソコンに向かって大戦略をやり出す。

すでに気付いている。物理的実在とはこういうことか。

私はこれまで自分の意思で動いていたのではなく、予め決められていたルールをさも自分で選んだかのように感じていたのか。サッカーでダブルハットをしたのも、既定路線だったということなのか。普段の僕らは、理解できないほど複雑なものを説明するのが億劫なため、規則あるものを不規則に感じ、混沌を是としている。方程式の完成とは、そのことに気付くことに他ならなかったのか。何もできない。思うことが形にならない。自律性を維持できない=考えることに意味がないというのは、何と恐ろしいことだろうか...

眠りたい。意識があるのが苦痛だ。僕の意味が存在したとしても、それを伝達する手段がなかったとしたら、世界など...世界など、存在しなくてもいい。

もう眠りたい...

にちようび

今朝は、起きることも、できなかった、どうや、らじっけんのれ、ポートでいそが、しいようだいま、はいつたい何時なのだ、ろうとけいはすぐよこのたな

